

## 長期の血圧変動が認知症リスクに

高血圧は認知症や認知機能障害の重要なリスク因子であるとされており、血圧値に関係なく血圧変動が認知機能低下や認知症に影響を及ぼす可能性が指摘されている。本研究では、血圧変動が認知機能障害や認知症の独立した予測因子になるかについてメタ解析を行い検討した。

2021年5月までに発表された文献をMEDLINE、Embase、psyclINFO、CINAHL、Web of Scienceで検索した。認知症または認知機能障害リスクの予測因子として血圧変動を用いた縦断研究を対象に含めた。解析の結果、特定された5,919件のうち、縦断研究は16件あり、それらの研究の参加者は700万人以上、年齢中央値は50.9-79.9歳、フォローアップ中央値はおよそ4年であった。13件が受診ごとの血圧変動を報告しており、収縮期血圧変動は認知症および認知機能障害のリスクを上昇させることが示された（ハザード比はそれぞれ1.11、1.10）。受診ごとの拡張期血圧変動についても同様にリスク上昇がみられた。メタ回帰分析により、血圧変動の大きさと認知症および認知機能障害リスクとの間に線形関係が認められた。一日のうちの血圧変動においても同様の結果が得られた。

したがって、長期的な血圧変動は、認知症や認知機能障害の独立したリスク因子であり、血圧変動を抑える介入が認知症の早期予防になると考えられる。

出典：Hypertension. 2021; 78: 996-1004.